



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	日本と中国の子どもの育ちに関する意識：日本と中国の親と保育者の比較から(fulltext)
Author(s)	劉,海紅; 倉持,清美; 金,敬華
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 62(2): 229-240
Issue Date	2011-02-00
URL	http://hdl.handle.net/2309/108119
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

日本と中国の子どもの育ちに関する意識

—— 日本と中国の親と保育者の比較から ——

劉 海紅*・倉持 清美**・金 敬華***

保育心理学分野

(2010年9月27日受理)

問題と目的

日本と中国の現代社会では、ともに一人っ子や少子化が進み、幼児の保育の中心的担い手は親となっている¹⁾。また、就学前に幼稚園、保育園などの集団保育施設に通う子どもは、日本、中国ともに大半を占めている。このような状況から、日本と中国の幼児期の育ちには、親とともに、保育者が大きく関わっていると想定できる。本研究では、中国と日本各々における親と保育者が、子どもの育ちについてどのような意識を持っているのかを検討することとする。

近年、日中の子育てを巡る比較研究は盛んに行われている。それは、隣国である中国との文化的相違を明らかにしつつお互いの理解を深めようとする流れであり、重要な研究テーマである。そうした研究の蓄積から、日中の親が持つ子育て観、子ども観の相違が明らかになりつつある。例えば日中の親を対象に行った比較調査では、中国の親は子どもに対する学習面での期待がより高いことが分かった²⁾。中国の親は我が子と一心同体の状況を保ち続けたいため、甘い態度で我が子に接し、できるだけその感情を傷付けないようにと、我が子を育てる。外で子ども同士が喧嘩した時などは、親は他人の子を叱り、我が子をかばうことが多い。また、我が子への寛大な振る舞いによって、中国の親達は子どもとの一体性を確保しようとしているように見えると言う³⁾。Benesse 教育研究開発センターの「幼児の生活アンケート」(実施:2005年3月,対象:幼児を持つ東京・ソウル・台北・北京・上海の

東アジア5都市の母親)では、「子どもの将来に対する期待」に対しての回答としては、東京では「友人を大切にする人」「他人に迷惑をかけない人」「自分の家族を大切にする人」の順に上位を占めた。同じ質問に対して、上海と北京では「自分の家族を大切にする人」「まわりから尊敬される人」「仕事で能力を発揮する人」が上位を占めた⁴⁾。その他にも、中国の親は、全般に子どもの進学や学業に関心が高く、高学歴志向であり、それだけに教育の現状・結果への不満度もやや高い⁵⁾ことや、幼稚園で子どもに漢字の読み書きや計算などいわゆる受験に勝ち抜くために必要な知識を伝授しないと、直接園長に言い、このままでは転園するという圧力をかけることが一般的に知られている⁶⁾。こうした研究から、中国の親は日本と比べて、人とかかわる力を身に付けることよりも、学力を身に付けることを重視する傾向が強いと言える。

一方、日中の保育現場の保育者を対象とした研究は少ない。その中でも Tobin らは、日米中の3カ国の比較調査を実施し保育者に保育の現場で生じる様々な現象について尋ねるという興味深い研究を行っている⁷⁾。後に唐澤らもまた同様の調査を保育者養成校の学生に実施している⁸⁾。その結果、「なぜ社会は幼稚園を持つべきか?」という質問に対して、日本は「グループの良きメンバーになるための経験を子どもに与えるため」や「社会の一員となるためにはどうしたら良いか学ぶため」といったグループ志向の回答が、2つの研究とも高い割合を占めた。一方中国では「子

* 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究所

** 東京学芸大学

*** 中国吉林省四平市鉄西幼稚園

どもに勉強の良いスタートの機会を与える」ためという項目が激減した。親の期待と異なる傾向が見られた。また、筆者らが日本と中国の保育者のいざごの介入方法や幼稚園の役割や子ども観などについていくつかの報告をしている^{9) 10) 11)}。その結果、日中の保育者の子どものいざごの介入方法に相違が見られた。日本の保育者ではいざごは当事者各々が思いを持っており、それをくみながら当事者達全てが納得するような解決方法を一緒に考えようとしていた。一方中国では、是非を明確にして問題解決のためのスキルを教えるという解決方法を示していた⁹⁾。幼稚園で育みたいものとして、中国の保育者は「知力とともに、基本的な生活習慣を身に付けさせることや色々な遊びを経験させること」を上位に選択している。このことから中国の保育者は遊びの重要性に気付きつつあると言える¹⁰⁾。また、実際の保育の現場で、ごっこ遊びを中心とした自由遊びに中国の保育者が計画した学習や教育目的を組み込み、一斉指導によって子ども全員に知識を伝授している¹¹⁾。これらのことから、中国の保育者の意識は変わりつつあり、中国の幼児教育は過渡期にあることを示唆している。

本研究は日本と中国の幼児期の子どもの育ちに大きな影響を与える親と保育者の子ども観や幼稚園の役割に対する意識や子ども同士のいざご場面における介入の仕方に焦点を当て比較することによって、日中の親や保育者の子どもを育てる意識の相異を明らかにすることが主な目的である。いざご場面を取り上げたのは、他児との相互交渉を経験する場であり、社会性の発達にとって重要な場面であること、しばしば大人の介入を必要とする場面であり、大人の意識が反映しやすい場面と考えたからである。

方法

(1) 調査期間・対象・方法

本研究では、日本と中国の親・保育者を対象に質問紙調査を行った。

日本

親：2003年6月上旬～下旬 東京都江戸川区にある3つの幼稚園に調査を依頼し、園長先生の許可を得て、手紙と一緒に、通園している子どもの親へ質問紙を配布し、自由に園に持ってくるように回収を行った。3園1143部配布し、861部回収した。回収率75.3%だった。

保育者：2007年5月上旬～12月下旬 インターネットで調べ任意で選んだ東京23区内の公立幼稚園

27園に電話をして了解を得た上で、120部の質問紙を郵送し、110部が返送された（回収率は91.7%）。その他、別の調査でインタビューを実施した公立幼稚園の10名の保育者からも質問紙を回収し、合計120部を回収した。

中国

親：2003年8月上旬～下旬 吉林省四平市の8つの幼稚園に調査依頼し、園長先生の許可を得て、担任の保育者を通じて、通園している子どもの親へ質問紙を配布し、自由に園にもって来るように回収を行った。8園985部配布し、401部回収した。回収率40.7%だった（2003年SARSの影響で約半分の子どもは通園していない状態になったため、回収率が低くなった）。

保育者：2008年5月から8月にかけて、上海市にある4つの公立幼稚園にインターネットで質問紙を送り、各園長先生に質問紙をインターネットで回収し、送ってもらった結果、合計43部を回収できた。その他、別の調査で集団インタビューを実施した56名の保育者からも質問紙を収集し、合計99部を回収した。

(2) 調査項目

①子ども観

親と保育者が子どもにどのように育てて欲しいと考えるのかを尋ねた。具体的な項目は下記の通りである。

- a どんな子どもに育ててほしいですか？（親：6項目から2項目選択；保育者：7項目から2項目選択）（表1参照）
- ②幼稚園の役割について：親が子どもを入園させる理由と、保育者が捉える親の入園理由について選択してもらった。親が望むことを保育者がどのように捉え、それは保育者が考える幼稚園の役割と一致しているのかどうかを検討することを目的とした。具体的な項目は、下記の通りである。
- b お子様を幼稚園に入園させる理由は何ですか？（7項目から2項目選択）（表3参照）
- c 親が子どもを入園させる理由は何だと思いますか？（7項目から2項目選択）（表3参照）
- ③いざご場面における介入について、親と保育者に子どもの玩具の奪い合いで生じる葛藤の介入の仕方を検討することを目的とした。具体的な項目は下記のとおりである。

親：

- d お子様が使っている玩具を他の子に取られた理由でトラブルが生じたとき、どう対処しますか？（7項目から2項目選択）（表5参照）

- e お子様が他の子が使っている玩具を取った理由でトラブルが生じたとき、どう対処しますか？（7項目から2項目選択）（表6参照）

保育者：

- f 子ども達が玩具の取り合いをして喧嘩になったとき（どちらかが先に使っていたか分からないような場面）保育者はどう対応しますか？（8項目から2項目選択）（表8参照）

(3) 分析方法

質問紙は統計解析ソフト「SPSS18.0」で分析を行った。なお、日本の親と中国の親については、選択項目から上位2項目を順番につけて選択することを求め、日本の保育者と中国の保育者については、上位2項目を選択することを求めた。中国の親と日本の親については、保育者の場合と同様にするために順位を廃して、2項目を併せて集計することとした。

結果と考察

1 子ども観

日中の親・保育者の子ども観について、「どんな子どもに育てたいですか？」の質問を行った。

表1は、国ごとに親と保育者が「どんな子どもに育てたいですか」という質問の上位2項目を選択してもらった結果を示したものである。日本と中国を比べて、日本の親が選択した割合が高かった項目は「心の優しく思いやりのある子」（84.5%）と「健康・丈夫な子」（78.5%）だった。

中国の親の選択の割合が高かった項目は日本と同様に、「健康・丈夫な子」（86.4%）と「心の優しい思いやりのある子」（60.2%）であり、さらに「自立できる子」（41.8%）も多かった。

保育者には、選択項目に「聡明で勉強ができる子」も加えた。日本の保育者が選択した割合が高かった項目は「心の優しく思いやりのある子」（85.8%）「自立できる子」（60.8%）「健康・丈夫な子」（46.7%）であった。それに対して、中国の保育者の選択した割合が高かった項目は「自立できる子」（75.8%）「健康・丈夫な子」（68.7%）「心の優しく思いやりのある子」（24.2%）であった。「聡明で勉強ができる子」（21.2%）も多かった。

日本の親と保育者、中国の親と保育者のいずれも、上位3つの項目は同じであった。そこで、この3つの項目間に人数の偏りがないかを検討するために、 3×4 の χ^2 検定を行った（表2）。その結果、人数の偏りは有意であった（ $\chi^2(6) = 175.826, p < .01$ ）。そこで、残差分析を行った結果、表2にみられるように、「健康・丈夫な子」は日本保育者の割合が少なく、中国の親の割合が高かった。「心の優しい思いやりのある子」は、日本の親の割合が高いが、中国の親と保育者の割合は低かった。「自立できる子」は日本の親の割合は低い、日本の保育者、中国の親と保育者の割合が高かった。

日本の保育者が「自立」の割合が高いのは、最近の

表1 「どんな子」の選択割合 単位：人（%）

項目	日本親	日本保育者	中国親	中国保育者
健康・丈夫な子	645 (78.5%)	56 (46.7%)	343 (86.4%)	68 (68.7%)
心の優しい思いやりのある子	695 (84.5%)	103 (85.8%)	239 (60.2%)	24 (24.2%)
自立できる子	208 (25.3%)	73 (60.8%)	166 (41.8%)	75 (75.8%)
ルール守る子	76 (9.2%)	7 (5.8%)	15 (3.8%)	10 (10.1%)
従順な子	5 (0.6%)	0 (0.0%)	22 (2.5%)	0 (0.0%)
聡明で勉強できる子*		1 (0.8%)		21 (21.2%)
その他	13 (1.6%)	0 (0.0%)	6 (1.5%)	0 (0.0%)
合計	822 (100.0%)	120 (100.0%)	397 (100.0%)	99 (100.0%)

*日中の親について「聡明で勉強できる子」の項目は設けなかった。

表2 表1の調整された残差

項目	日本親	日本保育者	中国親	中国保育者
健康・丈夫な子	0.5	-5.54 **	3.00 **	-0.15
心の優しい思いやりのある子	6.82 **	1.64	-4.89 **	-6.83 **
自立できる子	-9.05 **	4.88 **	2.30 *	8.62 **

* $p < .05$ ** $p < .01$

幼児教育の考え方によると思われる。2008年（平成20年）に幼稚園教育要領が改訂され、「人間関係」の内容の取扱いの部分では、「集団の生活の中で、幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自信をもって行動できるようにすること」と記述されたように、日本の幼児教育は子どもの自立を強調するようになり、保育者の回答にそのような考え方が反映していると言える。その一方で、「健康・丈夫な子」の割合は低かった。集団生活の中で、身体面についてはことさら強調して育てたいこととしては捉えられていないのかもしれない。

日本の親が「自立」の割合が低い理由のひとつとして、調査対象としたのが幼稚園の親であることが考えられる。ほとんどが専業主婦と想定でき、子どもに手がかけられる分、それほど自立を求めているのかもしれない。一方で、日本の親が、「心の優しい思いやりのある子」の割合が高いのは、日本では他者との協力を重視する傾向が強いことを示す他の研究^{4) 5) 6)}から示唆を得ることができる。日本の親は、他者と関係を作っていくのに必要な優しさや思いやりを特に重視していると考えられる。

一方、中国の親・保育者は、子どもの健康丈夫さや自立できることが多く望んでいることから、他者に対する思いやりや優しさなどより個人の能力を重視する現代中国社会を良く現していると言える。また、中国の子どもはほとんど一人っ子で、家庭では「小皇帝」として、大事に育てられている。自分の身の回りのことができないうまま幼稚園に入ってくるため、親も保育者も自立能力を養うことを求めているのだろう¹⁰⁾。

2 幼稚園の役割

表3は日本と中国の親に「子どもを幼稚園に入園させる理由は何ですか」、保育者に「親が子どもを幼稚園に入園させる理由は何だと思いますか」を尋ね、2項目を選択したときに選択された項目の割合を示し

ている。子どもを幼稚園に入園させる理由として、日本の親が選択した割合が高かった項目は「人と関わる力が身に付く」(67.4%)「友達ができる」(77.0%)「基本的な生活習慣」(27.3%)であった。一方、中国の親が選択した割合が高かった項目は「知力が付く」(77.1%)「人と関わる力が身に付く」(79.1%)「基本的な生活習慣が身に付く」(21.9%)であった。

保育者が捉えた親の入園させる理由として、日本の保育者が選択した割合の高かった項目は「色々な遊びができる」(67.5%)「友達ができる」(65.0%)「人と関わる力が身に付く」(52.5%)であった。一方中国の保育者が選択した割合の高かった項目は「基本的な生活習慣が身に付く」(67.7%)「知力が付く」(41.4%)「友達ができる」(31.3%)であった。

日本と中国の保育者が各々挙げた項目の上位3つに入る項目である「知力」「人と関わる力」「いろいろな遊びができる」「友達ができる」「基本生活習慣が身につく」の人数の偏りがどうかを検討するために、 5×4 の χ^2 検定を行った(表4)。その結果、人数の隔たりは有意であった($\chi^2(12) = 1088.256, p < .01$)。そこで、残差分析を行った結果、表4のように、「知力」は中国の親と保育者で割合が高く、「友達ができる」は日本の親と保育者で割合が高かった。「人と関わる力」は中国の親で割合が高く、日本の保育者と中国の保育者は割合が低かった。「いろいろな遊びができる」は日本の保育者の割合が高く、中国の親は割合が低かった。「基本的な生活習慣が身につく」は中国の保育者で割合が高く、日本の保育者や中国の親は割合が低かった。

日本の親・保育者ともに集団保育の中で「友達ができる」ことも期待している。そのことから、少子化核家族化進んだ日本においては、集団保育で仲間ができることへの期待が高まっていると言える^{9) 10) 11)}。また、日本の保育者は、「いろいろな遊びができる」割合が高い。これは、日本の幼児教育の特徴が「遊びを中

表3 「入園させる理由」の選択割合 単位：人 (%)

項目	日本親	日本保育者	中国親	中国保育者
知力が付く	30 (3.6%)	3 (2.5%)	306 (77.1%)	41 (41.4%)
人と関わる力が身に付く	554 (67.4%)	63 (52.5%)	314 (79.1%)	24 (24.2%)
友達ができる	633 (77.0%)	78 (65.0%)	22 (5.5%)	31 (31.3%)
色々な遊びができる	179 (21.8%)	81 (67.5%)	51 (12.8%)	18 (18.2%)
基本的な生活習慣が身に付く	224 (27.3%)	15 (12.5%)	87 (21.9%)	67 (67.7%)
家で世話する人がいない	6 (0.7%)	1 (0.8%)	8 (2.0%)	17 (17.2%)
その他	16 (1.9%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)
合計	822 (100.0%)	120 (100.0%)	397 (100.0%)	99 (100.0%)

表4 表3の調整された残差

項目	日本親	日本保育者	中国親	中国保育者
知力	-20.993**	-5.797**	24.775**	3.74**
人と関わる力	0.448	-2.602**	4.443**	-6.052**
友達ができる	16.646**	1.974*	-17.926**	-3.116**
色々な遊びができる	-1.178	11.145**	-5.242**	-0.744
基本的な生活習慣が身に付く	-0.185	-3.593**	-2.634**	9.272**

+p<.10 *p<.05 **p<.01

心」としているのです。親もそれを期待しているのだろうと保育者が考えるためと思われる。その一方で、「基本的な生活習慣」の日本の保育者の割合は低い。日本の幼稚園の在園時間は標準4時間であり、基本的な生活活動の多くは家庭が担っていることの現れだろう¹²⁾。

中国では、「知力」に関しては、中国の親は幼稚園に期待し、保育者も親がそのように期待していると考えている。しかし、親が「人と関わる力」を養うことを幼稚園に期待しているが、中国の保育者はそのように思っていない。「基本的な生活習慣」については、親は幼稚園に期待している割合が少ないが、保育者は親が期待していると考えている。「知力」以外の部分で、親が期待していることを中国の保育者が正確に認識していない可能性が示唆できる。今後は、親が幼稚園に求めていることを正確に把握していくことが必要だろう。

3 いざこざ場面における介入

3.1 親の介入

子どもの対人場面におけるしつけについて、「お子様が使っている玩具を他の子に取られた理由でトラブルが生じたとき、どう対処しますか」と「お子様が他の子が使っている玩具を取った理由でトラブルが生じたとき、どう対処しますか」の2つの質問を行った。その結果、表5・6に示した。

表5の玩具を他の子に取られたときの対処として、

日中の親の選択した割合の高かった項目が共通として「相手の子と一緒に遊びたいという気持ちを自分の子に言う」日本(84.3%)中国(74.7%)と「トラブルに介入しない」日本(32.0%)中国(26.3%)であった。「自分の子の悲しい気持ちを相手の子に伝える」日本(41.7%)中国(29.6%)この上位3つの項目に人数の偏りがないかを検討するために、3×2のχ²検定を行った。その結果、有意ではなかった(χ²(2)=2.980, ns)。対処方に大きな違いは見られなかった。

表6の自分の子が他の子の玩具を取ってしまったときの対処として、日本の親の選択した割合の高かった項目は「相手の子の悲しい気持ちを自分の子に伝える」(77.8%)と「返さないと言ふ自分の子に言う」(42.4%)と「玩具を勝手に取ってしまう子が悪い子だよと自分の子に伝える」(32.2%)であった。一方中国の親の選択した割合の高かった項目は「相手の子の悲しい気持ちを自分の子に伝える」(51.4%)「返さないと言ふ自分の子に言う」(44.3%)「子どもを連れ去る」(35.2%)であった。各々の国の上位3つに入った項目に人数の偏りがないかを検討するために、4×2のχ²検定を行った(表7)。その結果、人数の偏りは有意であった(χ²(3)=296.803, p<.01)。そこで、残差分析を行ったところ、表7のように、日本の親は、「相手の子の悲しい気持ちを自分の子に言う」「玩具をとった子が悪いと自分の子に言う」の割合が高く、中国の親は、「子どもを連れ去る」の割合が高かった。

表5 「親の玩具が他の子に取られた時の介入」の選択割合 単位：人(%)

項目	日本親	中国親
トラブルに介入しない	263(32.0%)	104(26.3%)
相手の子と一緒に遊びたいという気持ちを自分の子に伝える	692(84.3%)	295(74.7%)
自分の子の悲しい気持ちを相手の子に伝える	342(41.7%)	117(29.6%)
返さないと言ふ相手の子に言う	33(4.0%)	45(11.4%)
玩具を勝手に取ってしまう子が悪い子だよと自分の子に伝える	74(9.0%)	139(35.2%)
子どもを連れ去る	25(3.0%)	47(11.9%)
その他	152(18.5%)	28(7.1%)
合計	821(100.0%)	395(100.0%)

表6 「親の他の子の玩具を取った時の介入」の選択割合 単位：人 (%)

項目	日本親	中国親
トラブルに介入しない	64 (7.8%)	57 (14.4%)
相手の子の悲しい気持ちを自分の子に伝える	639 (77.8%)	203 (51.4%)
自分の子の一緒に遊びたいという気持ちを相手の子に伝える	203 (24.7%)	99 (25.1%)
返しなさいと自分の子に言う	348 (42.4%)	175 (44.3%)
玩具を勝手に取ってしまう子が悪い子だと自分の子に伝える	264 (32.2%)	96 (24.3%)
子どもを連れ去る	6 (0.7%)	139 (35.2%)
その他	78 (9.5%)	15 (3.8%)
合計	821 (100.0%)	391 (99.0%)

表5表6の結果から、日中の親は子どもの間で生じたトラブルへの対処の仕方が似ていることが分かった。しかし、日本の親は自分の子どもが他の子の玩具を取ったときに、はっきりと玩具取った子が悪い子だと言う親が多いのに対して、中国の親は子どもを連れ去り、トラブルを回避しようとする親の割合が多かった。先述したように、日本の親は子どもと対立意見を率直に述べ、よしあしを子どもに伝える傾向にある。一方中国の親は子どもと一体感を保つため、子どもとの対立をなるべく避ける傾向にある。更に、外で子ども同士が喧嘩したときになどは、中国の親は他人の子どもを叱り、我が子をかばうことが多い。我が子がころんだりしたら、そのようにさせた地面が悪いと言って、親は子どもに道路や石ころを責めて見せたりすると言う³⁾。このような、子どもについて形成してきた

文化によって、子どもへの関わり方がだいぶ異なる。

3. 2 保育者の介入

集団生活の中のいざこざ場面における子どもへの介入について、保育者に「子ども達が玩具の取り合いをして喧嘩になったとき(どちらかが先に使っていたか分からないような場面)保育者はどう対応しますか?」という質問を行った、その結果表8に示した。

表8を示すとおり、日本の保育者の選択した割合の高かった項目は「なぜ欲しいのかを聞く」(66.7%)「お互いの子どもの気持ちを訴えさせ、一緒に遊ぶように促す」(45.8%)「ほしくなったときにはお友達に貸してと言いなさいと教える」(37.5%)であった。一方、中国の保育者の選択した割合の高かった項目は「欲しくなったときにはお友達に貸してと言いなさいと教える」(64.6%)

表7 表6の調整された残差

項目	日本	中国
相手の子の悲しい気持ちを自分の子に言う	7.23**	-7.23**
返しなさいと自分の子に言う	-0.39	0.39
玩具を取った子が悪いと自分の子に言う	2.75**	-2.75**
子どもを連れ去る	-16.848**	16.848**

+ p < .10 * p < .05 ** p < .01

表8 「保育者の介入」の選択割合 単位：人 (%)

項目	日本保育者	中国保育者
トラブルに介入しない、子ども達自分で解決させる	9 (7.5%)	34 (34.3%)
お互いの子どもの気持ちを訴えさせ、一緒に遊ぶように促す	55 (45.8%)	24 (24.2%)
玩具を取られた子どもの悲しい気持ちを伝える	44 (36.7%)	7 (7.1%)
返しなさいとものを取った子どもに言う	0 (0.0%)	2 (2.0%)
勝手に玩具を取る子どもが悪い、その子を叱る	0 (0.0%)	8 (8.1%)
子どもを引き離せる	7 (5.8%)	16 (16.2%)
なぜ欲しいのかを聞く	80 (66.7%)	43 (43.4%)
欲しくなったときにはお友達に貸してと言いなさいと教える	45 (37.5%)	64 (64.6%)
合計	120 (100.0%)	99 (100.0%)

「なぜ欲しいのかを聞く」(43.4%)「トラブルに介入しない, 子ども達自分で解決させる」(34.3%)であった。

各々の国の上位3つに入った項目に, 人数の偏りがないかを調べるために, 4×2 の χ^2 検定を行った(表9)。その結果, 人数の偏りは有意であった($\chi^2(3) = 39.697, p < .01$)。そこで残差分析を行ったところ, 次の表のように, 日本の保育者は, 「お互いの子どもの気持ちを訴えさせ, 一緒に遊ぶように促す」と「なぜほしいのかを聞く」の割合が高く, 中国の保育者は, 「トラブルに介入しない」「欲しくなったときには, お友達に貸してと言いなさいと教える」の割合が高かった。

これらの結果から, 日本の保育者は子ども達の欲しがる理由や気持ちなどを聞き出して, 心理的な支援を行っている。それに対して, 中国の保育者は言葉を教えるか, あるいは子どもに解決を任せるといった割合が高かった。つまり, 日本の保育者のような心理的な支援より, 具体的な解決方法を教えるといった支援の方が子ども達の要求に合致していると中国の保育者は理

解しているのだろう⁹⁾。

4 子ども観といざこざ場面における介入との関連

4.1 親の子ども観といざこざ場面における介入

親の子育て観といざこざ場面における子どもへの介入の関連を分析した。具体的には, 「どんな子どもに育てたいですか」の日中の親が選択した上位3項目である「健康丈夫な子」「心の優しい思いやりのある子」「自立できる子」と対人場面で「お子様が使っている玩具を他の子に取られた理由でトラブルが生じたときの対処」及び「お子様が他の子が使っている玩具を取った理由でトラブルが生じたときの対処」をクロス集計した。その結果それぞれ表10・表11に示した。

表10に示すとおり, 中国の親も日本の親も, 「どんな子」に関わらず, 「相手の子と一緒に遊びたい言う気持ちを自分の子に伝える」の割合が高かった。日本の親は, 「心の優しい思いやりのある子」については,

表9 表8の調整された残差

項目	日本	中国
トラブルに介入しない, 子ども達自分で解決させる	-4.552**	4.552**
お互いの子どもの気持ちを訴えさせ, 一緒に遊ぶように促す	3.281**	-3.281**
なぜ欲しいのかを聞く	3.207**	-3.207**
欲しくなったときにはお友達に貸してと言いなさいと教える	-3.045**	3.045**

+p < .10 *p < .05 **p < .01

表10 「親のどんな子X他の子に取られた介入」の選択割合

単位: 人 (%)

項目	国別	健康・丈夫な子 心の優しい思いやりのある子 自立できる子		
		健康・丈夫な子	心の優しい思いやりのある子	自立できる子
トラブルに介入しない	日本親	98 (21.7%)	27 (9.7%)	22 (30.1%)
	中国親	60 (19.1%)	6 (30.0%)	12 (25.0%)
相手の子と一緒に遊びたいという気持ちを自分の子に伝える	日本親	260 (57.6%)	202 (72.7%)	38 (52.1%)
	中国親	189 (60.2%)	8 (40.0%)	26 (54.2%)
自分の子の悲しい気持ちを相手の子に伝える	日本親	43 (9.5%)	23 (8.3%)	7 (9.6%)
	中国親	19 (6.1%)	5 (25.0%)	2 (4.2%)
返しなさいと相手の子に言う	日本親	8 (1.8%)	1 (0.4%)	1 (1.4%)
	中国親	14 (4.5%)	0 (0.0%)	3 (6.3%)
玩具を勝手に取ってしまう子は悪い子だよと自分の子に伝える	日本親	11 (2.4%)	12 (4.3%)	1 (1.4%)
	中国親	26 (8.3%)	1 (5.0%)	5 (10.4%)
子どもを連れ去る	日本親	4 (0.9%)	2 (0.7%)	0 (0.0%)
	中国親	2 (0.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
その他	日本親	27 (6.0%)	11 (4.0%)	4 (5.5%)
	中国親	4 (1.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

*表10は国毎にどんな子に育てたいかを100とした場合の%を示した。表11・12同様。

他の「どんな子」と比べて圧倒的に「相手の子の一緒に遊びたい気持ちを自分の子に伝える」割合が高く、「トラブルに介入しない」割合は少なかった。一方、中国の親は、「自分の子の悲しい気持ちを相手の子に伝える」割合も高く、また、「トラブルに介入しない」割合も高く、日本と、その点では異なる。また、日本の親は「自立できる子」の場合、「トラブルに介入しない」割合が高くなっている。中国の親は、「自分の子どもに玩具を取った子が悪い子だ」という親の割合は日本の親より9割も高かった。

表11を示す通り、中国の親も日本の親も、「どんな子」に関わらず、「相手の子の悲しい気持ちを自分の子に言う」の割合が高い。日本の親は「自立できる子」は「トラブルに介入しない」割合が他の「どんな子」よりは多くなっているが、中国の親は、「玩具をとってしまう子が悪い子だよと伝える」の割合が高くなっている。「心の優しい思いやりのある子」は、日本では、他の「どんな子」と比べて「返しなさいと自分の子に言う」の割合が高いが、中国では「トラブルに介入しない」の割合が高くなっている。

全体的な傾向として、日本の親は、「自立」を望む場合、トラブルに介入しない傾向にあり、中国の親は、「心の優しい思いやりのある子」を望む場合に、「トラブルに介入しない」割合が高い。「自立」や「心の優しい思いやり」の言葉の意義について、国毎のニュアンスの相違があるのかもしれない。この点については、更に検討が必要だ。

4. 2 保育者の子ども観といざこざ場面における子どもへの介入

保育者の子ども観と集団生活の中でのいざこざ場面における子どもへの介入の関連を見てみた。具体的には、「どんな子どもに育てたいですか」の日中の保育者の選択した上位3つ「健康丈夫な子」「心の優しい思いやりのある子」「自立できる子」の項目と保育場面で「子ども達が玩具の取り合いをして喧嘩になったとき（どちらかが先に使っていたか分からないような場面）保育者はどう対応しますか」をクロス集計した。

表12から、「健康・丈夫な子」「心の優しい思いやりのある子」「自立できる子」に育てたいと思うそれぞれの保育者の子ども達のトラブルへの介入に違いが見られず、表8の結果と一致している。日本の保育者はなぜほしいのかを聞いて、それぞれの子どもの気持ちを聞き出して、玩具を取られた子の悲しい気持ちを伝えたりして、子ども達の心理的な支援を行っている。ただ、項目の「お互いの気持ちを訴えさせ、一緒に遊ぶように促す」に対して、筆者ら2008年に行ったインタビューに対して、日本の保育者はお互いの気持ちを訴えさせることはするが、一緒に遊ぶように促したりはしないと話していた。一方、中国の保育者は具体的な解決のスキルを子ども達に直接教えるか、子ども達解決を任せていることが分かった⁹⁾。また、心の優しい思いやりのある子に育てたいと思う中国の保育者は「トラブルに介入しない、子ども達自分で解決させる」「なぜ欲しいのかを聞く」「お互いの子どもの気持ちを訴えさせ、一緒に遊ぶように促す」を選択した割合は

表11 「親のどんな子X他の子の玩具取った介入」の選択割合 単位：人 (%)

項目	国別	健康・丈夫な子	心の優しい思いやりのある子	自立できる子
トラブルに介入しない	日本親	26 (5.8%)	4 (1.4%)	9 (12.3%)
	中国親	35 (11.1%)	5 (25.0%)	5 (10.4%)
相手の子の悲しい気持ちを自分の子に言う	日本親	256 (56.8%)	162 (58.3%)	34 (46.6%)
	中国親	141 (44.9%)	10 (50.0%)	22 (45.8%)
自分の子の一緒に遊びたい気持ちを相手の子に言う	日本親	21 (4.7%)	9 (3.2%)	0 (0.0%)
	中国親	23 (7.3%)	1 (5.0%)	3 (6.3%)
返しなさいと自分の子に言う	日本親	75 (16.6%)	60 (21.6%)	12 (16.4%)
	中国親	83 (26.4%)	2 (10.0%)	9 (18.8%)
玩具を勝手に取ってしまう子が悪い子だよと自分の子に伝える	日本親	60 (13.3%)	36 (12.9%)	14 (19.2%)
	中国親	27 (8.6%)	2 (10.0%)	8 (16.7%)
子供を連れ去る	日本親	1 (0.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	中国親	2 (0.6%)	0 (0.0%)	1 (2.1%)
その他	日本親	12 (2.7%)	7 (2.5%)	4 (5.5%)
	中国親	3 (1.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

表12 「保育者のどんな子X介入」の選択割合 単位: 人 (%)

項目	国別	健康丈夫な子	心の優しい思いやり	自立できる子
トラブルに介入しない, 子ども達自分で解決させる	日本保育者	3 (5.4%)	8 (7.8%)	6 (8.2%)
	中国保育者	24 (35.3%)	12 (50.0%)	25 (33.3%)
お互いの子どもの気持ちを訴えさせ, 一緒に遊ぶように促す	日本保育者	24 (42.9%)	48 (46.6%)	31 (42.5%)
	中国保育者	15 (22.1%)	8 (33.3%)	16 (21.3%)
玩具を取られた子どもの悲しい気持ちを伝える	日本保育者	20 (35.7%)	39 (37.9%)	26 (35.6%)
	中国保育者	4 (5.9%)	3 (12.5%)	7 (9.3%)
返しなさいとものを取った子どもに言う	日本保育者	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	中国保育者	2 (2.9%)	0 (0.0%)	2 (2.7%)
勝手に玩具を取る子どもが悪い, その子を叱る	日本保育者	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	中国保育者	6 (8.8%)	0 (0.0%)	7 (9.3%)
子どもを引き離せる	日本保育者	3 (5.4%)	5 (4.9%)	5 (6.8%)
	中国保育者	13 (19.1%)	2 (8.3%)	12 (16.0%)
なぜ欲しいのかを聞く	日本保育者	38 (67.9%)	68 (66.0%)	51 (69.9%)
	中国保育者	29 (42.6%)	10 (41.7%)	32 (42.7%)
欲しくなったときにはお友達に貸してと言いなさいと教える	日本保育者	24 (42.9%)	38 (36.9%)	27 (37.0%)
	中国保育者	43 (63.2%)	13 (54.2%)	49 (65.3%)

高く, 日本の保育者と似ていることから, 中国の保育者の子ども観が変わりつつあり, 中国の幼児教育が過渡期にあることをよく表していると言える。

総合考察

以上述べてきたように, 子ども観について, 日中の親と保育者の上位3項目に入っている項目は共通している。日中の親・保育者の子ども観には大きな違いが見られなかった。グローバル化により, 人々の交流が盛んになり, 日本と中国ともに世界を相手に仕事をするようになった今, 求める子ども像が似て来ていることと考えられる。また, 入園させる理由では, 日本の親と保育者が捉えた親の考えについては, 一致している。一方中国の親と保育者では, 「知力」に関しては一致しているものの, 親が「人と関わる力が身に付く」ことを最も重要視しているのに対して, 保育者は「基本的生活習慣が身に付く」と捉えている。両者の考えに大きな隔たりがあった。前述したように, 親が幼稚園に対して, 子どもに「知力」を教えないと転園すると脅すなどの圧力をかけることが良く知られている⁶⁾。保育者は親の「知力重視」の圧力を重く受け止めて, 「人と関わる力」「基本的生活習慣」などについては知力の次と捉えていると思われる。以前の中国では, 良い大学に入れば, 国からよい仕事をあっせんしてもらえ, 楽な人生が送れた。そのため, 勉強は何よりも大切であった。しかし, 中国はここ十年目覚ま

しい経済発展を遂げ, 社会や人々を取り巻く環境が著しく変化した。北京オリンピックや上海万博の開催によって, 国際交流がますます盛んになっている。人々は, 激しい競争社会に勝ち残るために, 人と関わる力や知力など“優れた能力”が求められている。以前のように勉強ができて, 良い大学さえ入れればという時代はもはや去って行った。これからは世界中の様々な人と仕事をしていく上では, 人と関わる力が求められている。現在幼児を持つ働き盛りの親達は日々それを実感している。また, 現在ほとんどの家庭が一人っ子となっている。そのため, 親は幼稚園で同年齢の仲間との遊びを通して人と関わる力を強く望んでいると思われる。基本的生活習慣については, 中国の幼稚園は1日保育をしており, 親は子どもが長時間の園生活で自然に身に付くことができると考えているため割合が低くなっているだろう。

いざこざ場面の介入では, 日本の親は自分の子どもが悪いことをしたときに, 良い教育の機会と見なし, きちんとしつけを行う傾向にある。日本人は, 他人の子どもが悪いことしたときに, 「この子の親の顔を見たい」という言葉があるように, しつけは親の責任としてなされるべきものだという認識があるからだろう¹⁴⁾。一方中国の親はしつけする時に良く「乖」(グアイ)という言葉を使う。つまり, 親の言う事をちゃんと聞く子どもが良いとされる。そのため, 親は自分の子どもが悪いことしたときに自分の子どもをかばって, その代わりに, 自分の言う事を良く聞いてもらうと

言う³⁾。本研究においても、同じ傾向が見られた。日中保育者の子ども観と介入の仕方との関連は見られなかったが、介入の仕方は明らかに異なっている。日本の保育者はいざこざ場面において、双方の子どもの気持ちを聞き出して、心理的な支援を行なうのに対して、中国の保育者は直接解決できる方法を教えるのである。また日本の保育者は親と異なり、「玩具を取った子どもが悪い」という直接的な表現を避け、他人の気持ちを気づかせることで、子ども達が他者との関係を自ら調整できると考えている。そして、支援を受けた子どもは自分の力で努力して問題を克服し、そうした経験を積み重ねていくことで、子ども自身の自信の獲得につながっていく。そのことについて、保育場面での保育者の言動の比較研究が示唆を与える。子ども達が大きな声で騒いでいる時に、中国の保育者は「うるさい」「静かにしなさい」という表現で子ども達に向かって注意する。一方、日本の保育者は「ありさんの声でお話しようか」という表現で注意する事が多いと指摘している¹⁵⁾。つまり、親子関係以外の日本人の対人関係の特徴として、直接対決を避ける傾向があると言える。中国の保育者は日本の保育者のように、子ども達の活動の良き理解者・支持者“仲間”という立場を取っていない。教師という立場から、子ども達が間違った時に、はっきりと叱って、教えていると思われる。本研究の介入の仕方からも同様な傾向が見られた。

最後に本研究では、親の調査と保育者の調査の実施時期にタイムラグがあった。日本と中国ともに、経済社会の急激な変化の渦中にあり、人々を取り巻く社会環境、あるいは人々の意識が社会の変化によって、大きく変わっている。そのため、現在の親の意識と調査当時の意識にズレがあるかもしれない。親の調査を改めてしなおすことを今後の課題として取り込んでいきたい。

本研究にご協力いただきました、日本と中国の幼稚園の保護者の方・園長先生・諸先生方と園児の皆さまに深く感謝致します。

引用文献

- 塘利枝子・出羽孝行・童昭恵, 日本・韓国・中国の小学校教科書に反映された親役割の変化—親役割の変化と社会状況との関係—, 平安女子大学研究年報, 第4号, pp31-32, 2003
- 依田明・三井えい子・伊東孝郎・前田央子・倉方・劉麗・清水弘司, [幼児の性格形成と母子関係]に関する日中比較調査, 家庭教育研究所紀要16, 財団法人小平記念会家庭教育研究所, pp5-48, 1994
- 大和田滝恵・馮 宝華, 中国の育児書と中国社会, 恒吉僚子・S.ブーコック(編), 育児の国際比較 子どもと社会と親たち, 東京:日本放送出版協会, pp187-191, 1997
- Benesse 教育研究開発センター, 第3回 幼児の生活アンケート・東アジア5都市調査, ベネッセコーポレーション, 2005
- 一見真理子, 中国における家庭教育とそのサポートシステム, 研究紀要, 第31号(特集家庭の教育力), 日本教材文化研究財団, pp74-79, 2001
- 王 春燕, 中国学前課程百年発展と変革の歴史研究, 教育科学出版社, pp80-81, 2004
- Joseph J.Tobin, David YH Wu, & Dana H, Davidson. *Preschool in Three Cultures:Japan, China, and the United States.* New Haven and London. 1989
- 唐沢真弓・林安希子・松本朋子・向田久美子・トビン・ジョセフ・朱 瑛, 幼児教育文化的意味—日本, アメリカ, 中国における文化間及び文化内比較—, 発達研究(財)発達科学研究センター紀要Vol.20, 財団法人発達科学教育センター, 東京, pp33-41, 2006
- 劉海紅・倉持清美, いざこざを通して見た中国の保育者の保育観—日本の保育者の保育観との比較から—, 乳幼児教育学研究, 第17号, pp63-72, 2008
- 劉海紅・倉持清美, 集団保育の役割について中国の保育者の考え方—日本の保育者との比較から—, 日本家政学会誌, 12号, pp987-996, 2009
- 劉海紅・倉持清美, 保育場面における中国の保育者の子どもへのかかわり方, 日本家政学会誌, 8号, pp453-461, 2010
- 芦澤清音, 浜谷直人, 田中浩司, 幼稚園への巡回相談による支援の機能と構造: X市における発達臨床コンサルテーションの分析, 発達心理学研19, pp252-263, 2008
- 金敬華, 子どもの遊びタイプと社会性との関連, 修士論文, 東京学芸大学, 2003
- 劉海紅, 日中の保育者の保育観, 修士論文, 東京学芸大学, 2007
- 塘利枝子・高向山・童昭恵, 日本・中国・台湾の保育者が期待する子ども像—子どもの「はずれた」行動への保育者の対応に焦点をあてた予備調査考察—, 平安女子大学研究年報第3号, pp57-68, 2002